「消えゆく腸内細菌を集めろ」

長崎大、人の環境適応能力など調査

高地など特殊な環境に住む人から、腸内細菌が人の環境適応能力や健康にどんな影響を与えているか調べる研究を長崎大の山本太郎教授（国際保健学）らが始めた。食事の西洋化や抗生物質の影響で、現代人の腸内細菌の種類が急速に減っている可能性があり、今も昔ながらの生活をしている人の便の保存も急ぐ。

どの人の体にも約100兆個の細菌がいる。さまざまな種類の細菌は、臓器に影響を与えるほか、肥満やアレルギーなどの体の不調や健康維持にも関与しているとの研究が最近、相次いで発表されている。

一方、医療や畜産のために抗生物質が多量に使われていることや、世界的に食事の西洋化が進んだ影響で、伝統的な生活をしていた頃に持っていた細菌の多様性が失われるという報告がある。

山本氏らは10月、調査地の選定のためネパールを訪問。来年から、人類学や生物学の専門家らと協力し、食べ物が乏しく、酸素も薄い厳しい環境で暮らしている人から便を収集し、細菌の遺伝情報を調べる。

並行して菌を生きたまま保存する技術の開発に取り組む。調査は南米にも広げる。

高地に適応した人は、食生活の変化によって糖尿病になりやすいとの指摘があり、細菌がどんな影響を与えているかも調べたいという。

人類は環境変化に対して、進化による「生物学的適応」と、薬や蚊帳の発明による「社会的適応」を利用して健康を維持してきた。山本氏は「体内の微生物はこれらに続く第3の適応の仕組みを担っているのではないか」と語った。

長崎大が腸内細菌を調べるネパール・アンナプルナ連峰の麓に住む子供ら（山本太郎長崎大教授提供）

2015年12月10日産経新聞